福祉の歴史における時期区分の意義

天理大学人文学部教授
松原　浩一郎　*Koichiro Matsubara*

前回（９月号）、社会福祉とは何かという定義およびその歴史的経緯について論じた。「社会福祉とは何か」という問いに、明確かつ統一的な定義を提示することは非常に難しい。このため、社会福祉を対象として、その形成過程を研究し、将来の展望を明らかにする社会事業史の研究も、社会福祉をどう定義するのかにより研究の視点や方法に違いが生じる。

わが国の社会福祉学領域において、社会事業史研究に大きな業績を残した研究者の一人に吉田久一（1915 ～ 2005）がいる。吉田の業績の一つは、わが国の福祉史を時期区分したことである。とりわけ、明治期以降の近現代の福祉史を、「近代化」の視点から区分した意義は大きい。

ここで時期区分の意義と必要性を述べてみたい。

明治時代や大正時代というように、元号を基準とした時代区分は、社会の変化や人々の生活の変化とはまったく関係なく、天皇の在位と改元が連動したものである。たとえば、大正が終わって昭和になったと時代を分ける。このような区分は、制度として定められたものであり、社会構造の変化や、福祉制度の変化を伴うものではない。たとえ時代区分と社会の変化が一致しても、そこに必然性はない。さらに、元号の変化を年代順に並べて、それぞれの時代の出来事を順番に羅列しただけでは、その事実は理解できても、変化の実相を把握するまでには至らない。同様に福祉の出来事を順に並べても、変化の実相を読み解くことはできず、事実（事業）の理解、あるいは確認にとどまる。そこで、福祉の変化を、単に年代順に時間の連続性だけで捉えるのではなく、歴史的な「変化の構造」を明らかにする必要がある。言い換えるならば、どこで（どの時点で）福祉の性格が質的・量的に変化したのかを見極めて、そこに必然性や法則性を見いだすことで、変化をもたらす要因が明らかになる。

吉田は福祉の歴史を、単に人物とその事業を羅列したり、孤立した制度の変化として捉えたりするのではなく、社会そのものの変化との関連で捉えようとした。とりわけ「近代化」を中心に位置づけた。社会構造が近代化することにより、都市問題が生じ、失業を伴いながら、それまでとは異なる貧困が社会問題として現れる。そのため、社会構造の変化に対応して、救済システムの社会的意味が変化するのである。吉田は、この変化の分析をとおして時期区分を行ったのである。つまり、それまでの慈善・博愛の救済活動から社会事業への変化を、福祉制度の歴史的意味の変化として見たのである。

このような社会との関連、とりわけ近代化の中で福祉史を捉えると、単なる時間的経緯の整理にとどまらず、それまでとは違う意味をもつ福祉事業が形成されるという転換点を見いだすことができる。それは「社会事業史における歴史的転換をどう認識するのか」という、歴史観あるいは歴史認識そのものに関わる問題だともいえる。

わが国では、明治期以降、殖産興業の国家施策のもとで、資本主義経済体制が形成され、次第に発展して産業化が進み、労働問題や都市問題といった新たな社会問題が生じた。したがって、福祉史における近現代史では、時期区分がとりわけ重要になる。つまり貧困救済という実践や事業は、それが展開される社会の変化に伴って、その実践や事業の社会的意味も大きく変化する。たとえ見える行為自体が同じでも、歴史的意味が大きく異なるのである。

さらに重要な視点は、救済行為の歴史的意味の変化を見る視点だけではなく、因果関係を見ることである。言い換えると、救済が歴史的にもたらす意味の変化ではなく、なぜその時に変化したのかという、社会との関係性をみることである。たとえば、都市化が進んで新たな都市問題が生じ、それが深刻化することで労働運動が起こり、社会事業思想が発展する。その結果、救済行政が変化し、それに伴って社会事業の専門職化が進む、という視点である。貧困を個人の怠惰や不道徳など、当事者の性格や生活習慣などから生じる事象だとは捉えず、社会との関係性から生じるものと捉える認識の変化が、それまでとは違う救済制度を生み出したとみなすのである。さらに、新たな貧困が社会的に認識されるようになることは、一人ひとりの貧困観や福祉思想の変化でもあり、その結果、新たな貧困に対応する救済の形態がつくり出されるのである。このような「いつ変化したか」→「何が変化したか」→「なぜ変化したか」の探究を可能にするために、時期区分は有効なのである。そしてこの探究は、現在の社会福祉へ示唆を与え、今後の社会福祉のあるべき姿を展望する。

このように、社会福祉史の時期区分は、社会構造・社会問題・社会福祉思想・制度・実践・担い手などの相互関係が、どのような転換を遂げたのかを歴史的に把握するための方法なのである。したがって、時期区分には少なくとも３つの意義がある。

1．歴史を構造的に理解する意義
　年代順に出来事を羅列するのではなく、各時代の社会福祉の特徴を把握できる。
2．歴史的変化を説明する意義
　「いつ変化したか」だけでなく、「何が変化したか」→「なぜ変化したか」を考えられる。
3．現在の社会福祉を歴史化する意義
　現在の制度や理念を「最初からそうだったもの」とせず、特定の歴史的条件の中で形成されたものとして捉えられる。

本連載において、著者は教内の福祉史の時期区分を試みたいと思っている。その過程を通して、教内でどのような福祉実践が生まれ、それが何によってもたらされ、その後どのように変化して現在に至ったのかを明らかにすることで、今後の教内の福祉実践を展望したい。

［参考文献］

吉田久一（1990）『吉田久一著作集』第３巻改訂増補版、川島書店。
大谷、大友、永岡ほか編（2021）『吉田久一とその時代』法蔵館。